

悪役令息レイナルド・リモナの華麗なる退場 2

＋グウエンドルフ

近衛騎士団長を務める、
フォンフリーゼ公爵家の長男。
莫大な魔力を持ち、眉目秀麗。
基本無口で無表情だが、
レイナルドに対しては
大型犬のように懐いている。

＋ベル

チーリンと呼ばれる聖獣。
親代わりのレイナルドに
育てられた。

＋レイナルド

会社員だった前世を持つ、
エリス公爵家の次男。
乙女ゲームの「悪役令息」と
同じ道を辿らぬよう奮闘するものの、
トラブル体質のため裏目に出ることが多い。
元同級生のグウエンドルフから
告白されていて……!?

＋ウイル

レイナルドのご用聞き
である、従者見習い。
魔法の才能があり、
優れた手紙蝶を作る。

＋クリス

王宮の護衛騎士。
優しく頼りがいのある
性格で、入院している妹を
常に気にかけている。

＋ルシア

次期聖女候補。
乙女ゲームの主人公だが、
ある事件をきっかけに
眠り続けている。

＋シオン

乙女ゲームの
攻略対象者でもある、
上級神官。規律に忠実で、
人にも自分にも厳しい。

CHARACTERS

目次

悪役令息レイナルド・リモナの華麗なる退場 2	7
番外編 グウエンドルフ・フォンフリーゼの内省	273
番外編 ウイルの業務報告	297
番外編 桜の木の下で	331

悪役令息レイナルド・リモナの華麗なる退場 2

第一章 事件を追う悪役令息、黒幕に陥れられる

ルロイ公爵領、教会本部。見上げるほど巨大なこの教会は、先の尖った尖塔がいくつも連なったような複雑な外観をしている。しかしそれよりも圧倒されるのは、教会の敷地を厳重に取り囲んでいる塀だ。強固な石造りで、大人のゆにに三倍くらいの高さがある。

いつ見ても厳めしいな。

俺はそう思いながら、ピカピカに磨き上げられた銅色の門の前に立った。

今日は普段の外出着で来てしまったけれど、宮廷魔法士のローブを着てきた方がよかつただろうか。先触れを出しているとはいえ、社交界に縁遠い俺は、貴族の間ではあまり顔が知られていない。重くてかさばるけど、権威だけはある、あの白いローブを羽織ってくるべきだったか。怪しまれて追い返されたりしないよな。

まあでも、俺がエリス公爵家のレイナルドだと名乗れば、多分わかつてもらえるだろう。名前だけは有名だから——悪名で。むしろ名乗ったら追い出されるかもしれない。

心の中で乾いた笑いを漏らしてから、隣にいるグウエンドルフを見上げた。

「グウエンは教会の本部って、来たことある？」

俺の印象が最悪でも、一緒にいる彼のおかげでなんとかなるだろう。今日も黒い服で全身を固めているグウエンドルフは、俺の間に視線を寄越した。漆黒の髪と、オニキスのような深みのある黒い瞳。眼光が鋭くて強面だから、黙っているだけで人をたじろがせる威圧感がある。

デルトフィア帝国の近衛騎士団長であるグウエンドルフは、帝国随一といっても過言ではない膨大な魔力を持ち、名だたる魔法士達から天才と評される魔法使いだ。それに幼い頃から剣術の鍛錬を地道に重ねてきた努力家でもあり、今彼に剣で勝てる騎士はこの帝国には多分存在しない。ゆえに、二十歳にして近衛騎士団の団長を任されている。

それに、グウエンドルフは俺と違ってすこぶる評判がいい。あと、俺と同じ歳なのにかなり大柄だし、引き締まった逞しい体つきをしている。でも無口で愛想がないから、男前だけど近寄り難く、大抵の場合周囲に一步引かれてしまうんだけれども。

が、俺はもう慣れきっているんで、その無表情を難なく見つめ返した。

「……騎士団長に就任した際に、祖父とフォンドレイク副団長と共に訪れたことはあるが、深部まで立ち入ったことはない」

「そっか、そうだよなあ。ここには封印結界があるわけでもないし、俺は中に入るのは初めてだよ」

近衛騎士団長であるグウエンドルフは、普通の貴族が立ち入れないような王宮や教会の要所に通じている。封印結界の事件に巻き込まれたときも、結界を修復するには大聖女が造った宝剣が必要だと把握していた。封印結界や魔物のことなら、俺よりも余程詳しい。

「先触れは出しているからさ、多分入れてくれると思うんだ」

二人でここに来たのは、事件に関する調べ物をするためだ。一ヶ月前にトロン樹林の神殿で、バジリスクを使って聖堂の封印結界を破壊し、魔界から悪魔を召喚しようとした犯人を明らかにするために。そして二日前に俺が巻き込まれた、魔道機関車の事件の黒幕を探るために。

封印結界というのは、地上に開いてしまった魔界との穴を塞いでいる光魔法の結界のことで、帝国には五ヶ所ある。領土の四方を治める四大公爵領に一つずつと、中心部に位置する王都に一つ。

俺は王宮に仕える宮廷魔法士として、グウェンドルフの祖父であり、宮廷魔法士の長官であるファネル総帥から、一連の事件の犯人を追うように命を受けている。

次元の綻びを封じる結界を狙われているという状況は、帝国にとっては由々しき事態だ。平和を脅かす犯人を明らかにして、早急に捕らえなければならぬ。

という表向きのものとは別に、俺にはなんとかして犯人を見つけなければならぬという、とても個人的な、のつびきならない事情がある。

——俺が転生者だからだ。

この世界は、俺が日本人として生きていた前世で流行っていた乙女ゲームが舞台になっている。俺はそれを十二歳のときに思い出した。自分がゲームの攻略対象者でもモブキャラでもない、よりによって悪役である公爵令息のレイナルド・リモナに転生してしまったことを……

レイナルドは帝国の南方を治めるエリス公爵家の次男で、封印結界を破壊して悪魔召喚を企てる悪役である。俺はそんな悪事に手を染めていないが、現に今ゲームと同様の事件が起こっている。

犯人はまだ捕まっていない。

つまりこのまま事件の黒幕を捕まえられなければ、俺には一連の事件の首謀者に仕立て上げられ、断罪される未来が待ち受けているのだ。前世で乙女ゲームなんてやったことないのに、この世界の女神様は俺に全然優しくない。

頼りにしていたゲームの主人公であるルシアは、二日前の魔道機関車の事件に一緒に巻き込まれて、未だ目を覚ましていない。次期聖女候補と期待されたルシアの持つ光の精霊力は抜群に強いけれど、魔物を呼び集める召喚陣を無効化するために精霊術を使い、そのまま眠ってしまったのだ。突然主人公が不在という状況に陥って、俺は正直不安を覚えている。

これから転生仲間のルシアに色々な情報をもらおうと思っていたのに、その矢先に事件に巻き込まれたから、俺はこの先のシナリオをほとんど知らない。何が起きるかわからない中で、魔物を召喚したり魔界の術を操ったりする犯人を追わなければならないのだ。

しかし戸惑っていても仕方がないので、ルシア不在のまま調査を続行することにした。それで今日はルロイ公爵領にある教会本部にやってきたのである。

「グウェンは騎士団の方は大丈夫だったのか？ 魔道機関車の中で発動した召喚陣のせいだ、まだ魔物が活性化してるって聞いたけど」

俺の疑問に、門の中を厳しい表情で眺めていたグウェンドルフは頷いた。

「問題ない。私でなければ対処できないような魔物はすでに殲滅している」

「あ、そっか」

さらりと答えたけど、その言い方だとまだ完全に鎮圧されてないんじゃないか。本当に俺の調査に同行していいのか？　と思っただけで、二日前の事件で湖に落ちて死にかけた俺の、「一人で大丈夫だから」という言葉は彼には響かなかったらしい。だから、当然のようについて来たんだろう。

「そろそろ時間なんだけど、勝手に開けて入っていいのかな」

もう訪問を予告した時刻になっているはずだ。時間を確認しようと上着のポケットに手を入れた俺は、そこにあるのが使い慣れた我が家の懐中時計ではないことを思い出す。片手で取り出して見下ろしたそれは、ハンターケースが鋼のような艶のある黒色をしている。

交換したんだよね。グウェンと。

俺の持っていたエリス公爵家の家紋入りの懐中時計は、今グウェンドルフが持っている。そして俺はグウェンドルフのものを。

時計を見ながら、今朝実家であつたやり取りを思い出して、ちよつとそわそわしてしまつた。

魔道機関車の事件の後に、俺を見舞いに来た親友のルウェインから懐中時計の話聞いた。家紋入りの時計を交換して持っているのは、恋人の証だろってやつを。

俺は知らなかつたんだよ、それ。叡智の塔に通つた学生時代は、恋愛のれの字も出てこなかつたから。グウェンドルフに欲しいと言われて、湖から助け出されたときに交換した。それが恋人同士の慣例だと知つたのは、ルウェインの話を聞いてからだ。

えっ、何その慣習。どうする？　俺、すでに交換してるけど。

その事実を知つて動揺して、これからどうしようと思案していたところで、俺の外出に付き合うために着替えに戻つたグウェンドルフが帰ってきたのだ。

俺はそのときのことを思い出した。

* * *

とりあえず時計のことは伏せておこう。取り急ぎ片付けなければならないことがたくさんある。そう思つて懐中時計の話は有耶無耶にしようとしたのに、何を思つたのかグウェンドルフは無言でポケットから俺の懐中時計を取り出して、ルウェインに見せた。

「なあ。俺の目が確かなら、あいつが持つてるの、お前の懐中時計じゃねーか」

時計をじつと見つめて、親友は真顔で言つた。

「あ、うーん……。そういうことに、なりますね」

人ごとのような返事をしたら、ソファから立ち上がったルウェインに胸ぐらを掴まれた。もともとつり目がちの目がさらに尖り、濃いえんじ色の目をくわつと広げて俺に凄んでくる。

「なりますね、じゃねーよ!!　しっかり交換してんじゃねーかアホ!!」

「いや、俺も知らなくて」

「知らなくて、じゃねーわ!!　周りに誤解される前にさつさと返せ!　フォンフリーゼ、てめえもどうせ学生の慣習なんて知らねーんだろ。勘違いされたくなかつたら、早くこのバカに時計を返す

んだな」

ルウエインは俺の首元のシャツを掴んでがくがく揺さぶりながら、グウエンを振り返った。細身ではあるが、俺より背が高くて力も強いルウエインにがくがくされたら、俺にはどうしようもない。それに訂正のしようもないので、半笑いで両手を上げる。

すると、グウエンドルフは無表情のまま歩み寄ってきて、俺の肩をぐいっと掴んでルウエインから引き剥がした。俺と向かい合い、皺しわの寄ったシャツの襟元を直してくれる。

「私は、知っていた」

淡々とした口調で言い放った彼に、ルウエインが目を剥むいた。

「は!? お前、知っててこいつに懷中時計渡してんの? 時計を渡す意味わかってんのか!」

「ああ」

顔を引き皺しわらせたルウエインが、今度は俺を見た。その顔を見て、俺はへらっと笑い、「うん、なんか、そういうことみたいなんだよね」と首を傾げたら、ルウエインは目から皿でも出そうな勢いで驚愕した。

「そういうことみたいって、はあ!? お前ら、いつから付き合ってたんだよ!」

「いや、付き合っていないで……」

俺もどう説明したらいいものかと悩み、言葉を濁すと、ルウエインはしばらく固まっていた。グウエンドルフから告白はされた。好きだと言われたし、なんだかやけに距離を詰められてるな、というのを感じている。俺はグウエンドルフと一緒にいるのが嫌じゃないし、俺を守りたいと言っ

てくれる彼の気持ちも迷惑じゃない。でも自分も好きかと言われると、まだよくわからない。そういう答えしか今のところ持っていないのだ。

やがて我に返ったルウエインが、胡乱ごらんな目をして大きくため息を吐いた。

「いつの間に、そんな訳わかんねーことになってんだ。まったく……いや、もういい。これ以上は聞きたくない。聞いたら猛烈に後悔する気がする」

眉間に皺しわを寄せたルウエインは、俺達から一步離れてずっと片手を上げた。

「とりあえず、お前らがなんかそういう超展開を迎えてるのはわかった。あとは勝手にやってくれ。収まる場所に収まってから、そうなったのか、ならなかったのかだけ報告しろ。じゃねーこれからやり辛い。わかったか。お前だよ、まぬけ」

「面と向かって悪口言うなよ。わかったって」

「まあ、能天気なお前が、こういうタイプの奴の執着から逃れられるとは到底思えねーけど……好きにしろ。俺とソフィアを巻き込むなよ。じゃ、俺はまだ一昨日の後処理が残ってるから、帰るわ」

さらりと不穏なことを言ってから、ルウエインはあっさり身を翻ひるがえして部屋を出ていった。

何とも微妙な空気が残ってしまったが、俺が何か言う前にグウエンドルフが口を開いた。

「君の懷中時計は、返した方がいいだろうか」

そう聞かれて、俺はしばらく黙ってから、小さな声で答えた。

「持っていいよ」

そう言ってから、それは誠実な返事じゃないなと思ひ直す。

まだ自分の気持ちに答えを出していないなら、本当はちゃんと時計を返してもらって、俺もグウエンドルフに返すべきだ。それはわかっているのに、でも、なんか嫌だなと思ってしまった。

グウエンが俺の時計を持っている間は、彼にそういう関係の人間ができることはないということだ。だったら、俺はその方が安心する。

それが卑怯だつてことはわかってるんだけど。

覚束ない気持ちのまま、グウエンドルフの端整な顔を見上げた。

「ごめん。俺の言い方って思わせぶりでよくないよな。でも……まだグウエンとの関係に白黒つけるのが怖いっていうか、しばらくグレイゾーンでいたいっていうか……。いや、ごめん。これも卑怯だよな、悪い」

俺が言葉を探しながらも言うのと、グウエンドルフは少しだけ目元を緩めた。手を伸ばしてきた彼が、頭を軽く撫でてくる。

「わかった。謝らなくていい」

そして、真っ直ぐな目で俺を見つめ返した。

「私は私の意思で、君の時計は返さない。だから君も、自分の意思で決めてくれればいい」

「うん、……さんきゅ」

迷いなくそう言ったグウエンに、俺は小さく頷いた。

返さない、と言われて、何故かとても安心した。強張り^{こわば}りが解けたような気持ちでポケットの上か

ら懐中時計の形を捉え、指先でなぞる。

「そういえばこの時計の裏蓋、ダストカバーに魔法陣が彫つてあるよな。もしかして何か魔法がかつてる？」

俺の疑問にグウエンドルフが首肯した。

「フォンフリーゼ公爵邸に転移するための魔法陣だ」

「え？」

「それがあれば、いつでも自宅に戻れるように彫られている」

淡々と告げられた内容にぼかんとして、瞬きした。

えっと、それって結構秘密の術なんじゃないのか。

黙った俺を、彼は真顔で見下ろして続ける。

「君はすでにエリス公爵邸から私の屋敷に来られるが、もし他の場所から来たいときは使うといい」

いや、平然と言うなよ。

確かに、これに必要な魔力を込めて術を発動させられる人間は限られる。だけどな、自宅までの転移魔法陣を他人にはいはい渡していいのか。セキュリティ的に危ない橋渡つてるよ？

そうツッコミを入れようとしてグウエンドルフを見上げたら、彼が信頼の籠もった目で俺を見ていたので、声に出すのをやめた。

まあ、そんな風に信用されているのは、悪い気分じゃない。

でも絶対落とさないようにしないと、フォンフリーゼ公爵邸の治安に関わる。急に責任重大なものを託されていることに気づいて、早急に上着の内ポケットを頑丈な布に変えようと心に決めた。

それから気持ちを改めてグウェンドルフに向き直った。

「なんか色々あったけど、今日は一緒に行動してくれるってことでいい？」

「ああ」

「わかった。じゃあさっそくだけど、出かけよう。ちょっと調べたいことがあるから」

事件解決に向けて気持ちを切り替えた俺は執事呼んで、まずルロイ公爵領にある教会本部に先触れを出してもらったのだった。

* * *

そして約束の時間に間に合うように、グウェンドルフと一緒に教会本部まで来た。

「予告はしてあるんだし、入ってみようか。それで、図書室に入らせてもらえないか頼んでみよう。魔道機関車の中で見た召喚陣のことも調べたいし」

俺は、手の中の黒い懐中時計を眺めながらそう言う。

門を開けようとしたところで、敷地の奥から真っ白な神父服を着て、手に錫杖を持った男性がこちらに歩いてくるのが見えた。その見覚えのある顔に気づいて、俺は声を上げた。

「あれ、リビエール上級神父？」

俺と目が合った途端、彼は無然とした表情で会釈した。

一月前の卒業考査で、トロン樹林の神殿警護と一緒に担当したシオン・リビエール上級神父だ。会うのはそのとき以来だけど、微笑みが浮かぶことのない冷淡な顔は相変わらずだ。眼鏡ごしの惨憺な眼差しが、俺の身体を上から下まで迫る。

リビエール上級神父は、実はルシアの攻略対象者だ。線が細く整った顔立ちをしているクールなキャラだが、基本的には真面目で礼儀正しい人柄。しかし俺への当たりは厳しい。ゲームの強制力によりダメナルド様バイアスがかかった俺への評価が低いのか、はたまた俺が過去にルロイ公爵領で膝サポーターを売りさばいた事案が癪にさわるのか、どっちかだろう。後者の理由であれば、俺にも反省すべき点はある。善意だったんだけど、なんせ儲けすぎたからな。

「お待ちしておりました。神父長より、中まで案内するように申しつけております」

全然待つていたようには見えない無愛想な顔で、リビエール上級神父が言った。

「え？ ルロイ神父長が？」

「先日の聖女候補の誘拐事件について、うかがいたいことがあるそうです。こちらへ」

中から門を開いた上級神父にそう促されて、グウェンドルフと敷地内に入ろうとしたら、さっと目の前に手が出てきた。

「これは護符です。お持ちになって中にお入りください」

「あ、はい」

入る際の慣例なのかわからないけれど、言われるがままにそれぞれ護符を受け取った。

「……うわっ」

俺が触れた途端、護符が黒い炎を上げて燃える。仰天して慌てて手を離れた。

「なんですかこれ！」

叫び声を上げて抗議すると、明らかに険しい表情になった上級神官が俺に錫杖しやくじょうを構える。

「貴方こそ、神殿に何を持ち込もうとしているんです？」

そう言うなり、間髪かんはつを容れず光の炎を打ち出した。

「えっ」

「レイナルド！」

俺が応戦するより早く、グウエンドルフが前に出てシールドを展開する。上級神官が繰り出した炎はシールドにぶつかってパンと掻き消えた。

「何をする」

氷のような冷たさを感じる声音で、グウエンドルフがリビエール上級神官に問いかける。

上級神官は彼の威圧に僅わずかかに怯ひるんだものの、グウエンドルフの陰から顔だけ出して様子をうかがっている俺を険しい表情のまま睨んだ。

「護符が反応したのです。邪悪なものを持つていれば、反応して黒く燃えます。まさに今、彼が手にしたら燃えたでしょう」

確かに燃えたな。しかし心当たりがなくて困惑する。

「俺、何も持っていないはずなんですけど……」

困り顔でそう言うと、リビエール上級神官は片眉を上げてじつと見つめてくる。

「なんなら持ち物チェックしてもらってもいいですけど、どこが反応してるかわかります？」

後ろめたいことはないので、俺はさらに問いかけた。危険物を持つてるつもりはないし。

すると、リビエール上級神官はまた錫杖しやくじょうをこちらに向けて魔法を使った。

俺の前から退く気がないグウエンドルフを通してだったが、護符が反応した場所はわかったらしい。

「足元です。靴に何か入れているんじゃないですか？」

「靴？」

意外なものを指摘されてきよんとする。

別に何も仕込んでいないし、いつも履いている普段使いの革靴なんだが。

「え、何か踏んだかな」

片足を上げて足の裏を見みると、靴底の裏とかかたと、少しだけ黒い染みがあった。

それを見つけた俺は、ピンと来た。

「もしかして、誘拐犯のおっさんの血か？」

俺の言葉を聞いて、グウエンドルフも察したのだろう、表情を険しくする。あのとき、湖に落ちてびしょ濡れになった服は洗ったけど、革靴にこびりついた血は水で流しただけだったから多少残っていたみたいだ。

まだ訝いひかしげな顔をしている上級神官に、俺は事情を説明する。

「魔道機関車でルシアさんと誘拐されたときに、誘拐犯の血を踏んだんですよ。多分、禁術の対価として使われた人間の血だから、邪悪なものとして判定されたんじゃないかなと」

「……そうですか。わかりました」

リビエール上級神官は一応納得したのか、錫杖しやくじょうを下ろした。

「それでは、その履き物を脱いでお入りください」

上級神官の指示で、神官服を着た若い男性が代わりの靴を持ってきてくれる。靴を脱いで履き替えてから、もう一度護符をもらうと、今度は燃えなかった。

それを見て納得した上級神官の先導で、俺達はようやく中に入った。

意外にも、通されたのは応接スペースではなく、ルロイ神官長の執務室だった。

部屋の中は思ったよりも質素で、ギラついた感じはない。立派なのは執務机の前に置かれた革張りのソファくらいだ。机の上や棚の中も綺麗に整理されていて、清潔感がある。

壁際の棚の上には、家族の絵と思われる小さな額縁がいくつか飾られていた。ルロイ神官長と恐らく夫人の二人が描かれているものや、俺が以前会った今代聖女の若い頃と見られる絵もある。彼女はルロイ神官長の娘さんなのだ。

額縁の中では穏やかに微笑んでいるルロイ神官長だが、俺を見る顔つきは相変わらず険しい。促されてグウエンドルフと一緒にソファに座ると、さっそく話が始まる。

「次期聖女候補のルシア・ファゴット子爵令嬢は、まだ目を覚ましません。ファネル様から話ほう

かがいましたが、貴方からも何があったのかお聞きしたい」

「わかりました」

想定範囲内だったので、俺はルシアが誘拐されたところから、魔道機関車に乗った犯人達が召喚陣を使って魔物を呼び寄せ、さらに線路上に爆弾が仕掛けられていたことまでを順を追って語った。

「線路に爆発物まで……？ 聖女候補であるファゴット子爵令嬢を殺そうとしたのでしょうか。犯人は魔力封じの首輪まで所持していたのですね？ であれば、貴方がたを始末するのは簡単だったはずですが、何故わざわざ魔道機関車と一緒に爆破しようとしたのか……」

不可解そうな顔になった神官長が呟くつぶやくことはその通りで、俺も黒幕が何故あんな大掛かりな事件を起こしたのか疑問に思っている。

「ルシアさんは、召喚陣が描かれた禁術の発動を止めようとして、光の精霊術を使ってみたんです。まだ目覚めていないとおっしゃっていましたが、彼女は大丈夫なんですか？」

俺がそう聞くと、神官長は難しい表情になった。

「今のところ、目覚めないということ以外、健康に問題はありません。念のため、王立病院で様子を見ています。長期化すれば厄介ですが、上級神官達が力を尽くしているので、そのうち目覚めるでしょう……。聖女級の力を持つ者がいればすぐに解術できそうですが、今は次期聖女が決まっていない状況ですし、そもそもファゴット子爵令嬢自身が強い光属性の精霊力の保有者です。彼女以上の力を持つ者でなければ、術は解けないかもしれません」

ルシアが自分にかけて術はかなり強力だったようだ。ならば、ついこの前代替わりした聖女様に術を解いてもらうことはできないのか？ 神官長の娘さんでもあるわけだし。

俺は光魔法の解術についてはよくわからない。でも自分なりに考えてみて、もしかしたら禁術の魔の力自体を浄化すればルシアは目覚めるんじゃないか、と閃いた。魔界の瘴氣を祓える聖獣のベルを連れてくれば、俺にもルシアにかかった禁術を解術できる可能性がある。

ベルというのはチーリンという癒やしの聖獣で、以前森で保護してからうちで育てている俺の大事な家族だ。俺はベルが角に溜めた光の魔力を受け取って、使うことができる。

ベルの力を試す場合、俺がチーリンの力を使えることをバラす必要があるな。それはそれで厄介な展開になりそうだ。前々から貴重な聖獣を一貴族の屋敷で育てるなんて、とルロイ神官長達にはよく思われていないし、さらに俺がベルの力を分けてもらって使えますなんてことになったら、俺もベルも教会本部に監禁されかねない。

でも、もし上級神官達がルシアを目覚めさせることができないなら、そんなことも言っていられない。あと二、三日様子を見て、それでもルシアがそのままなら思い切って神官長に申し出よう。

神官長は誘拐事件の全容を聞きたかっただけのようで、話が終わると俺が教会本部に先触れを出した理由を聞かれた。そこで禁術に関する書物を閲覧させてほしいとお願いしてみたのだが、当然のことながら却下された。

「図書室は、神官か教会に属する者以外の立ち入りを認めていません。例外を認めるわけにはいきませんので、諦めてください」

「そうですか……。ファネル総帥から今回の諸々の事件の調査を命じられているので、その一環なんですけど、駄目ですか？ 禁術以外にも、教会の歴史について調べたいことがあるんです」

ダメ元で爺さんから一筆もらった書状を見せると、ルロイ神官長はそれを一瞥したのち首を横に振った。

「できません。申し訳ありませんが、禁術に関する書物は帝国の機密事項にもあたるので」

「ですよ。わかりました」

そう簡単には見せてもらえないだろうな、と思っていたので、俺は素直に引き下がる。すると、ルロイ神官長は小さく息を吐いてから軽く咳払いした。

「……この図書室は難しいですが、王都にある資料館ならば立ち入りを許可しましょう。そこには禁術に関する書物はありませんが、教会の歴史資料などは一通り揃っているはずです。普段は王族と高位貴族しか入ることのできない施設ですが、ファネル様の書状をお持ちなので特別に許可します」

そう言っ、ルロイ神官長はその場で王都の資料館長宛に許可証を書いてくれた。

思わぬ厚意に驚いて、俺は隣に座って置き物になっていたグウェンドルフと目を合わせる。

「ありがとうございます」

「貴重な資料ですから、くれぐれも取り扱いには慎重にお願いします。グウェンドルフ団長、彼をよろしく願います」

「はい」

何をよろしくなのかわからないが、結果オーライなのでよしとする。グウェンドルフと一緒にいたから、神官長も「見張り役がいるならまあいいか」という心境だったのかもしれない。人徳ある近衛騎士団長と一緒に来てよかった。

「今日はもう閉館でしょうが、お急ぎなら資料館に行つて入館の予約をお取りください」「わかりました」

神官長の部屋を出た俺達は、二人で相談した結果、言われた通り先に予約だけでもしておこうという話になった。

教会本部の建物から出て、門に向かおうとしたところ、リビエル上級神官に呼び止められた。「これから王都の資料館に向かわれるとうかがいました。今から庁舎の転移魔法陣を利用すれば、混雑に巻き込まれて時間がかかるでしょう。こちらの敷地内にある転移魔法陣を使つていただいで結構です」

「え!? 本当ですか?」

なんと太っ腹な。まさかりビエル上級神官がそんな気遣いをしてくれるなんて思わなかった。まじまじと眼鏡の整った顔を見つめると、彼は憮然とした顔で続ける。

「王都まで直通ではありませんが、ルロイ公爵領にある教会の転移魔法陣をいくつか経由して、王都の教会に転移できます。移動距離が短い分、時差もあり生じないでしょう」

「助かります。お願いします!」

庁舎まで移動して転移魔法陣を使わなくて済むなら、もちろん早く着く方がいいし、教会に描か

れた魔法陣を観察できる機会なんて滅多にない。

揉み手する勢いで笑顔を振りまくと、上級神官は眉間に皺しわを寄せて錫杖しやくじやうで地面を突いた。

「転移魔法陣を乗り継いで王都へ行くとすると、膨大な精霊力が必要になります。普通ならまずしない愚行ですが、貴方がたなら魔力切れで転移できなくなるようなことはないでしょう」

皮肉なのか賛辞なのかわからないコメントをもらい、リアクションに困ったが、何はともあれ厚意はありがたいといておくことにする。

「ちなみに、リビエル上級神官は王都にはあまり行かれないんですか?」

「ええ。私はほぼこの教会本部におります。今は聖女修練宮の講義のために王都へ出向きますが、ここから出ることはほとんどありません」

「そうなんですか。じゃあ、封印結界の警備でお会いしたのは貴重な機会だったんですね。またお会いすることがあれば、よろしくお願いします。今日はどうもありがとうございました」

「はい。それはそうと、よろしいですか、リモナ卿。貴方は栄えある宮廷魔法士のローブかを下賜された身。そうである以上は品性を高く保ち、日頃から勤勉で慎ましい行動に努めるように。神官長の悩みの種をこれ以上増やさないよう、商魂を極めるのはほどほどにしてください」

そう言つて腕を組み、じろりと俺を見据えたリビエル上級神官に、俺は引き攣ひきつつた笑みで「はい」と大人しく返事をした。俺に厳しいという基本スタンスは変わらないけど、品行方正で真面目なのはリビエル上級神官のいいところだよな。

こうして俺達は、教会本部の中庭に設置された転移魔法陣から王都の教会へ移動して、資料館で

事前に入館予約を取った。ルロイ神官長の許可証を出したら手続きもスムーズで、明日入ってもいいと言われたので、次の日に俺の家で待ち合わせる事になった。

* * *

翌日、朝食をとったあとで、俺は自室に戻ってさっそく着替え始めた。

「レイナルド様、今日はグウェンドルフ様の方が、こちらに来られるんですか？」

そう聞いてきたのはウィルだ。柵から俺のタイを取り出して、こっちに持ってきてくれる。

チョコレート色のふんわりしたショートヘアに、丸くて大きな濃い茶色の目。子供らしい幼さを残しながらも利発そうな顔立ちをしていて、身内の鼻^{ひなめ}目^めを抜きにしても可愛い。

ウィルは六歳の頃、訳あって俺が引き取って、それからずっとエリス公爵邸に住んでいる。今は俺のご用聞きとして、従者の見習いのようなことをしてくれている。育ての親としては俺に構わずに自由に生きてほしいのだけど、「僕はレイナルド様のお役に立ちたいんです」と大きな目でキラキラ見つめられながら言われたら、やらなくていいなんて返事できない。ものすごく可愛いからうちの子、天使じゃん、と思うから。

そんなことを考えていた俺は、「今日の朝の紅茶も美味^{おい}しかったよ。ありがとう」と、ほわっとした気持ちで日々の感謝を伝えるのである。それに対して照れたように笑ったウィルを愛^めでながら、俺は先ほどの問いに答えを返した。

「そうそう、今日はグウェンの方が庭から来るよ。うちから一緒に王都に行ってくる」

「お庭のガゼボにあるっていう、転移魔法陣からですか？」

「うん。一昨日みたいに玄関からは来ないから、出迎えなくていいよ。時間になったら俺が庭に行って落ち合うから」

エリス公爵邸には、グウェンドルフの屋敷まで転移できる転移魔法陣がある。

うちの庭にあるガゼボと、グウェンの屋敷の書庫の床に俺が描いたものだ。こっそり行き来できるようになっていて、俺はすでに何度か使って向こうに行っている。グウェンの屋敷の書庫は、魔術書が豊富で蔵書の質が素晴らしいのだ。

魔道機関車の事件でグウェンは何回かうちに来ているけれど、そのときは全部正面玄関からだった。どうせだから転移魔法陣を試してみようという話になり、今日は向こうから俺の家に転移してきてもらうことになっている。

「レイナルド様、昨日体調が回復したばかりなんですから、無理はしないでくださいね」

上着を羽織ると、心配そうな顔になったウィルがループタイを差し出して言う。

「うん、わかったよ。ありがとう」

タイを受け取ってお礼を言い、ウィルの頭をよしよしと撫でた。つやつやで、柔らかな子供の髪の毛の感触に癒やされる。恥ずかしそうに微笑むウィルの顔を見ると、日頃から面倒事に巻き込まれてやさぐれた心が浄化されていくような心地がした。

ここ最近、立て続けに色々なことが起こっているから本当は休みたいけど、その間にシナリオが

どう動くかわからないからな……

ただでさえダメナルド様バイアスのせいで、陰では俺が一連の事件の犯人なんじゃないかと噂されているし、いつ冤罪で捕まるかとヒヤヒヤしている。心の平穩のためにも早々に黒幕を突き止めたい。

やっぱりルシアがいないのが痛いな、とため息をついたとき、ソファの下で居眠りしていたベルが目覚まして、むくつと頭を上げた。

アーモンド型の目をぱちぱちさせてから俺を見つけ、首を振りながら伸びをするように立ち上がる。とことこと歩み寄ってきて、俺の足に身体を擦りつけて一周回ると、長い尾をゆらゆらと揺らして「クウ」と鳴いた。

「ベル、おはよう」

「キユン」

ベルは俺を見上げて高い声で鳴く。

チーリンという聖獣であるベルはまだ子供で、子鹿と子馬を足したような見た目をしている。額に真珠色の角があり、ふわふわの被毛は銀色とも金色ともつかない独特な色合いだ。光の加減で長い鬘が淡く水色を帯びたり、薄桃色に輝いたりするのが実に美しい。

「おなかすいた？」

「クウ」

——ちようだい。

そんな声が頭の中に聞こえたので、俺はベルの前にしゃがみ、柔らかな鬘を撫でながら、そつと角に触れて精霊力を流した。

ベルの角に溜め込まれた力で魔界の瘴気を浄化できるといことは、一ヶ月ほど前にトロン樹林で起きた神殿の事件で判明した。あのとき聖堂に撒かれたバジリスクの血のせいで封印結界の一部が綻び、一時的に魔界の穴が開いてしまった。俺とグウェンで結界は元に戻したが、修復した後には漂った瘴気を浄化するためにベルの力を借りたのだ。

「クルル」

精霊力を十分補充して満足したのか、ベルが尾を振って俺の頬をぺろ、と舐めてきた。

——あそぶ？

「遊びたいかい、そうだな。でも、ごめんなベル。俺、今から少しだけ出かけてくるから、帰ってきたら庭で遊ぼう。それまでウィルと待っててな」

「キユ」

少し不満そうな鳴き声を出したが、ベルはそれ以上ぐずることなくごろんと床に転がった。ならば撫でなさい、と言わんばかりにオパール色の目で見上げられて、俺はノックアウトされる。ベルのふわふわの背中と横腹の被毛をなでなでして、最上級の癒やしのひとときを堪能した。

「うちの子は、みんな可愛いなあ……。ベルは最近お話しできるようになって、ますます立派になったし」

ここ数ヶ月で、ベルが話していることがわかるようになってきた。会話が成立するたびにいち

ち感動してしまう。

「今度グウエンに魔法をかけてもらって、また森に遊びに行こうな。俺も早く事件を解決するから」

「クー」

グウエンドルフは、ベルの姿を子馬のように見せる錯覚の魔法をかけられる。ルシア達の卒業調査のとき、俺の気配を追いかけて叡智の塔まで来てしまったベルを隠すために施してくれたのだ。

思えば、グウエンドルフに再会したのはあのときが三年ぶりだったのか。なんだかここ最近頻繁に会っているせいで、自分達が卒業以来全く会っていないかったという事実をたまに忘れそうになる。叡智の塔に通っていたときは、寡黙で一匹狼のグウエンドルフとはほとんど話したことがなかった。それなのに、今はずっと前から一緒にいると錯覚しそうになるほど、彼の隣にいて違和感が無い自分がいるから不思議なものだ。

三年前の自分達の卒業調査で悪魔と戦ったときと同じように、一月前の卒業調査では、二人で結界の純びから姿を現した悪魔の指と戦って、トロン樹林の神殿を守った。

それからグウエンドルフの魔力暴走に関わったり、あいつの家族問題に口を出したりと、改めて振り返ってみても立て続けに色々なことがあったな。極めつきは、ゲームの主人公であるルシアが俺と同じ転生者だとわかった直後に起きた、あの魔道機関車の事件である。

『君は目を離すと、すぐに危険なことに巻き込まれている気がする』というグウエンドルフの指摘に反論できない。

『君が危うく死にそうになったのを見て……私は気づいた』『守ると決めた以上、君から目を離さないように、君が嫌がらないところで、私から手を出して傍にいたべきだ』

昨日の朝目が覚めてから、俺の部屋で話したとき、そう言ってくれたグウエンドルフの真剣な顔を思い出す。そう言われて俺は、嫌じゃなかったんだよな……

ひたむきに俺を守ろうとしてくれるグウエンの気持ち嬉しかった。

それで俺はグウエンに告白されて、キスまでした。勢いで。

湖に落ちて助け出された後にキスされたときは、俺は意識が曖昧だったし、どさくさに紛れてだったからあまり覚えていなかった。でも昨日キスしたのはばっちり覚えている。俺がそれを拒まなかったことも。

嫌じゃなかった。

だから流されたんだけど、いつまでも曖昧なままにしておくのもよくないよな。

答えを出すまで待つてほしいと言ったら、グウエンドルフは頷いてくれた。事件が解決したら、俺はちゃんと、自分の気持ちを整理しなきゃいけないと思う。

俺がどうしたいのか、グウエンとどうなりたいのか、ちゃんと考えよう。

その後、約束通り庭に現れたグウエンドルフと落ち合って、王都にある教会の資料館を訪れた。昨日と同様に入り口で許可証を見せて身分を明かすと、館長である上品そうなお爺さんが出てきて、資料室へ案内してくれた。

部屋の中は天井が高く、広い。書類の保護のためなのか、照明は抑えめで薄暗かった。壁一面に並ぶ本棚の中から、さっそく教会と聖女の歴史に関する本の閲覧を頼み、何冊か出してもらおう。

グウエンドルフと一緒に、部屋の中央にある閲覧用の台の上で本を並べ、ランプの明かりにペー지를照らして文字を読み進める。読みたいところを目次で探してそこまで紙を捲くと、隣で別の本を確認していたグウエンドルフが手を止めてこちらを見た。

「聖女の歴史か」

「うん。封印結界のことももう少し調べたくてさ」

そう言いながら、俺はバラバラとペー지를捲っていく。

その昔、桁外れの精霊力を持っていた大聖女様が魔界に通じる穴を封じたこと。その封印は長年聖女達が代替わりしつつ守護し、王都の神殿に籠もり祈りを捧げて封印結界の力を維持していること。聖女には光属性の精霊力を持つ女性が選ばれること。光属性を持つ人間は血縁に関係なくランドムに生まれることなど、俺も知っている情報が記されている。

「あ、結界の修復に使った宝剣についても載ってる。ふうん、あれってそれぞれの封印結界に一本ずつ供えられてるんだな」

その情報は知らなかった。他の封印結界にも宝剣がちゃんと安置されていたのか。確かに、トロノ樹林の神殿だけに宝剣があるのもおかしい話だよな。

俺が感心していると、グウエンドルフは知っていたのか軽く頷いた。

「全ての宝剣は、その昔女神の力を受け継いだ大聖女により造られ、魔界の穴を封じる際に使われ

たと聞いている」

なるほど。あの穴を全部塞いだなんて、大聖女様ってほんとにすごい人だったのね。

本の後半には、歴代聖女の名前が書かれたページがあった。ちょうどそれも調べてみようと思っていたので、よく読んでみる。

歴代の聖女は、王宮の中にある神殿に籠もる。もし代替わりして世俗に帰った人がいるなら、封印結界と悪魔のことを詳しく教えてもらえるかもしれないと思ったのだ。

本の中には、親切にも歴代聖女の名前が代替わりするたびに年号と共に書き足してあった。今代の聖女から遡って、数人の名前を確認していく。

リア・ルロイ

エリカ・リビエール

セレナ・リシャル

ルシア・ウエステリア

セレナ・バレンダール

ルシア・フェルナイン

「今の聖女様の名前は、リア・ルロイ……本当にルロイ神官長の娘さんみたいだね。交代したのは一月前くらいか。その前の聖女の名前はエリカ・リビエール。リビエールってことは、まさかリビエール」

エール上級神官の身内？」

それも知らなかったな。

横に書かれている就任した年を見ると、およそ十年前だ。それなら記憶にないのも頷ける。十年前なら、俺十歳とかだもんな。聖女の交代は教会の管轄だから、ルロイ公爵領以外の土地ではあまり関わりがない。市井しきに広く周知されるわけでもないから、聖女様の名前なまえはあまり広まっておらず、それで余計に記憶にないんだろう。

隣のグウェンドルフを見ると、彼も歴代の聖女の名前は気にしたことがなかったらしい。じつと文字を目で追っている。俺は続きの名前を指でなぞって読み上げた。

「それからセレナ・リシャルル、ルシア・ウェステリア、セレナ・バレンダール……。バレンダール公爵家って、そういえば時々神官を輩出するくらい光属性に縁のある家門なんだよな。これより前にもバレンダール公爵家から聖女が出てるみたいだし。さらに一つ前はルシア・フェルナイン。……これは知らない名前だな。というか、同じ名前、多くない？」

家名は違うけれど、名前被りが多い。聖女になったときに改名でもしてるんだろうか。

疑問に思った俺は、部屋の隅に控えていた館長に声をかけた。

「あの、よろしければ教えてほしいんですが……聖女様達ってよく改名されるんですか？ 同じ名前の方が多いなと思って」

白髪の館長は閲覧台に歩み寄ってきて、穏やかに頷いた。

「ええ、そうですね。聖女を拝命したときに改名される方も多いです。聖女様の中には、平民のお

生まれで貴族の養子になった方もいらっしゃいますが、そのときに聖女に縁のある名前に変えられることもあったそうです」

「なるほど、わかりました。ありがとうございます」

それなら同じ名前が多いという事実も納得だ。

そういえば、ルシアもファゴット子爵の養子になったとき、名前を変えたときとさりと云っていた気がするな。「ルシア」が改名した名前なら、以前の名前はなんだっただろう。確か、両親は亡くなったけど、お兄さんが一人いると言っていた。そのお兄さんの病気を治すために、ルシアはファゴット子爵の養子になった。大事にしている木彫りのブローチはお兄さんが作ってくれたもので、花の模様が彫られていたのを覚えている。

お兄さんの病気は治ったと言っていたけど、ルシアは時々お兄さんに会えたりしているんだろうか。それとも養子になってから連絡は途絶えてしまっているのか。

ルシアが入院していることを、お兄さんに伝えることはできないだろうか。きっと心配するだろうし、ルシアも目が覚めたときにお兄さんがいたら嬉しいと思う。

「レイナルド」

考え事をしていたら、グウェンドルフが小さな声で話しかけてきた。

「ん？ どうした」

「聖女の就任する年代が、少し気にならないか」

そう言われた俺は、ルシアのことは今度神官長に相談してみることにし、もう一度手元の本をよ

く見てみる。改めて歴代聖女の名前を目で追うと、直近の四、五人は十年ほどで代替わりしているが、その前は在任期間が二十年、三十年と長い。

「本当だ。最近では就任の間隔が短くなってるね。なんでだろう？」

就任する歳が高齢化していて、さらに年を取ると精霊力が弱まるとか……？ でも、昔は三十年やってた人もいるんだよね。ならば負担軽減のために、現役の期間が短くなっているということだろうか。それとも、光属性の精霊力を持つて生まれる子供が増えた？

でも、十年で代替わりしたら、引退した聖女様って案外世俗にたくさんいるんじゃないか？ それなら、その聖女様達に封印結界と悪魔の話を聞けるはずだ。

そんな風に思ったそのとき、風に乗ってどこからかふわりと蝶が舞ってきた。それはページを捲る俺の手に止まり、小さく羽ばたく。

金色の細かい模様の描かれた、本物の蝶かと見紛うほどの、紙で折られた蝶。これは手紙蝶という魔道具の一つで、メッセージを書いたり声を吹き込んだりして飛ばすと、届けたい相手のところに飛んでいくというものだ。

「総帥だな」

作った者の力量が一目でわかる優美な手紙蝶を手にとった俺は、開いて中を読んだ。そして、隣にいるグウェンドルフを見上げる。

「呼び出したよ。何か話があるみたいだ」

館長からまた来てもいいという言質を取った後、グウェンドルフと教会の資料館から出て王宮までの道を歩いた。その途中、道の先に懐かしい顔を見つけた。

「ミラード卿！ お久しぶりです」

路地に入ろうとしていたミラード卿は俺の声を聞いて足を止め、破顔した。

「レイナルド卿とグウェンドルフ団長じゃないですか。お久しぶりです。お元気ですか？」

今日は休日なのか、ミラード卿はラフなシャツとズボンを着て、手には小さな花束を持っている。茶色の髪と目を持つ彼は王宮の護衛騎士で、トロン樹林の神殿で事件に遭遇したとき、一緒に神殿の警備を担当していた。

「まあ、そこそこですね。最近毎日色んなことが起きるので」

歩み寄りながら正直にそう言うと、ミラード卿は軽く目を見張ってから噴き出した。

「レイナルド卿の噂はよく聞きますけど、本当にあちこちに顔を出されているんですね」

「いや、あのですね、噂を全部鵜呑みにされても困るんですよ？ それはそうと、ミラード卿はあの後大丈夫でしたか。トロンの神殿では怪我をされていましたけど」

「大丈夫です。ファネル様の形代のおかげで無事でしたし、もうすっかり元気ですよ。お二人は悪魔と戦ったにもかかわらず、大きな怪我はなかったとか。さすがですね」

色んなことが起こりすぎて、神殿での事件がだいぶ昔のことのように感じるが、まだ一ヶ月前の出来事だ。ミラード卿は神殿の中で悪魔の攻撃からルシアを守り、命を落とした。しかし総帥が作っていた形代の人形のおかげで、事なきを得ている。様子を見る限り、後遺症もなかったようだ。

でも、気のせいかあの日よりも顔色が悪いように見える。

「今日は非番なんですが、これから妹の見舞いに行かなくちゃいけないので、この辺で。また今度楽しい話を聞かせてください」

そう言ってミラード卿は微笑んだ。花束はお見舞い用だったらしい。ルシアが数年前に王都でミラード卿に会ったことがあると言っていたから、多分妹が入院しているのがこの辺りの病院なんだろう。小さな花束は、紫色の花で纏められていて可愛らしかった。

「呼び止めちゃってすみません。妹さんによりしくお伝えください」

俺の言葉に、ミラード卿は少し困ったような笑顔で頷いた。もしかしたら妹さんの容態があまりよくないのかもしれない。定型文のような挨拶をしたのは失敗だったかな。

「ありがとうございます。きつと話をしたら妹も喜ぶと思います。お二人もお気をつけて」

お辞儀をして、ミラード卿は背を向けようとする。そのとき、彼のズボンのポケットから何かが滑り落ちた。

「あ、ミラード卿、何か落ちましたよ」

「え？」

落ちたのは飾り紐だった。そういうえば神殿の警備のとき、ミラード卿の剣に付いていたものと同じだ。今時のデザインで洒落てるなと思ったけれど、よく見ると結構使い込まれている。擦れ具合が模様とよく馴染んでいた。

「ああ、ありがとうございます。お守りなので、剣を持ち歩かないときは外して持っているんです

が、ダメですね。やはり何かに付けておかないと」

「綺麗な紐ですね」

「昔、妹が作ってくれたんです」

にこりと笑ったミラード卿は、俺にもう一度お礼を言ってから去っていった。

ふと、ミラード卿にルシアのことを話した方がよかっただろうかと思った。二人は以前からの知り合いだったみたいだし。しかしルシアが眠り続けていることはまだ秘匿されているので、俺が勝手に話すわけにはいかない。

「ミラード卿、元気そうでよかったよな」

「ああ」

会話をしている間中ずっと無言だったグウェンドルフに苦笑いして、俺は王宮への道を再び歩き出した。

王宮にある総帥の部屋の前まで来ると、さっき届いた手紙蝶を扉の前に差し出した。蝶が鍵穴に吸い込まれ、カシャンと錠が外れる音がする。

「失礼します」

扉を押し開けて中に入ると、総帥は机の上に広げていた資料の間から顔を上げた。

「おお、レイナルド。早かったの」

「お呼びですか？」

爺^{じい}さんが杖を手に俺達の方へ歩いてくる。腰まで伸びた長い灰色の髪に、涼やかな藍色の瞳。まさに魔法使いという出で立ちのこの老人は、グウエンドルフの祖父であり、宮廷魔法士の長官であるファネル総帥だ。そして、一連の事件の犯人を突き止めるよう俺に命じた上司でもある。

「お主^めはまた厄介な事件に首を突っ込んだようじゃの」
「俺から突っ込んだんじゃないくて、否応なく巻き込まれたんですよ」

最近よくこの手の説明をしている気がする。

ため息交じりの俺の返事に総帥はほと笑い、猫のように目を細めた。

「その話は、また今度ゆっくり聞かせてもらおう。召喚陣が描かれた禁術のことなど、儂も詳しく知りたいからの。その前にレイナルド、今日はお主^めに頼みたいことがある」

「え？ なんですか」

てつきり魔道機関車の事件の事情聴取だと思つたのに、予想外のセリフで驚く。

「うむ。今一度、エリス公爵領とバレンダール公爵領の封印結界を見に行ってくれぬか。昨日、不審な人物が目撃されたと情報が入つての。結界は無事なようだが、もしかか仕掛けられていたら問題じゃ」

「わかりました」

俺が頷いたのを確認してから、総帥はグウエンドルフを不思議そうな顔で見上げた。

「はて。グウエンドルフ、お前は何をしておる。騎士団の方に戻らなくてよいのか？」

「え？」

俺の疑問にグウエンドルフが何か言いかけたまさにそのとき、総帥の机の上に置かれていた透明な結晶石がピカピカ光り始めた。

『ファネル様、ファネル様。突然申し訳ありません、少々よろしいでしょうか』

「……あれ？ この声は、フォンドレイク副団長？」

聞き覚えのある声だったので、思わず声が出てしまった。

落ちていた声音で呼びかけてきたのは、グウエンドルフと同じ北領に属するフォンドレイク侯爵家のご令息で、近衛騎士団のカシス副団長だ。

俺の言葉に、結晶石から驚いたような声が返ってきた。

『えっ？ その声はもしかして、レイナルド様ですか？ ファネル様のお部屋にいらっしゃるんですね。お話中にすみません。実は、今朝から団長を捜しておりまして。昨日の夜以降、連絡が取れないんです』

「グウエンドルフなら、今俺と一緒にいますけど」

『え!? 団長がそこにいるんですか!? レイナルド様と一緒に……?』

「えっと、はい。俺の仕事に付き合ってくれてて」

『付き合つて……。ああ……なるほど。つまりそういうことですね』

そういうことつて、どういうこと？ 今の妙な間は？

俺がツツコミを入れる前に、カシス副団長が続けた。

『団長、聞こえているならおわかりですよ。フォンフリーゼ公爵領の魔物の討伐はまだ終わって

「いけませんよ！ 今すぐこっちに帰って来てください」

それを聞いて今度は俺が驚いた。

「えっ！ グウェン、今日仕事あったの？ なんだよ、昨日言ってくればよかったのに。俺に付き合ってたらダメだろう。早く行ってこい」

横にいたグウェンドルフを見上げると、彼は無表情ながら不満そうな目をしている。

「団員が倒せないレベルの魔物は、一昨日全て討伐したはずだが」

『そんなこと言わないでくださいよ。雑魚は雑魚ですけど、一度巢から出てきちゃってるので、数が多すぎます。今日中に終わらせるためには団長の力が必要なんです』

「グウェン、封印結界を見に行くくらいなら俺一人で大丈夫だから、騎士団の方に戻れよ」

俺が横から口を出すと、グウェンドルフはますます眉間に皺を寄せた。

『ありがとうございます、レイナルド様！ そういうことなので、団長は戻ってくださいね』

「……」

『そうだ、レイナルド様。今度ご自宅の自室にも通信石を置かせてくれませんか。団長に急ぎで連絡を取りたいとき、居場所がわからないと不便なので』

「通信石？」

今話している、この結晶石のことだろうか。経費で買うのか知らないけど、これ結構高価なものだぞ。そんな簡単に部外者の自宅に提供したりしていいものなのか。

「駄目だ」

俺が答える前に、グウェンドルフが口を出した。

『え？ なんでですか？ レイナルド様のおうちにあったら便利じゃないですか』

「置くならご用聞きの少年の部屋だ」

『……………あ、はい。そうですね。わかりました』

いやだから、さっきからカシス副団長のその間は何？

「レイナルド」

俺の心のツツコミが置いてきぼりになっていることなんて知らないグウェンドルフは、渋い顔で俺の顔を見た。

「油断してはいけない。気をつけろ」

俺が一人になったら、また事件に巻き込まれると思っているんだろう。硬い表情を浮かべるグウェンに頷き、俺は彼にひらひらと手を振って笑う。

「わかったよ。大丈夫。うちの南領とバレンダール公爵領なら、通い慣れてるから」

グウェンドルフはまだ気がかりそうな顔をしていたが、最後には仕方がないという様子で頷いた。

「仲良くしているようで何よりじゃな。ではレイナルド、よろしく頼むぞ」

俺達の会話から何をどう捉えたのか、総帥はそんなコメントで締めくくると、俺に向かって下手くそなウインクをした。

グウェンドルフと別れて、俺はまず実家のあるエリス公爵領へ移動した。

ラズリシエの森まで行き、封印結界が施^{ほどこ}されている神殿の周りを確認する。最近何度か見回りに来ているが、今日も特に不審な点は感じない。その後、司祭に頼んで中を確認してから、近くの村で遅めの昼食をとった。そして次に帝国の西に位置するバレンダール公爵領へ移動する。

エリス公爵領とバレンダール公爵領には、少し前に俺が作った転移魔法陣がある。それを利用すれば二つの公爵領を簡単に行き来できるが、今日は一度王都を経由することにして、庁舎の転移魔法陣を使ってバレンダール公爵領に向かった。時間はかかるが、これでいい。実はちょっとした保険をかけているのだ。

バレンダール公爵領の封印結界は、シロナ山脈を隔^{へだ}てて、エリス公爵領の封印結界のほぼ対極にある。山の麓^{ふもと}にあるイソルデ樹林という樹海の中に、目的の神殿が建っていた。

四十年前、大きな事件を経験しているこの神殿は、他の公爵領にある神殿と比べて堅牢な造りになっている。ネズミ一匹通れないだろう完璧な警備の中、扉を叩いて中に入れてもらうのは至難^{むずか}の業だ。

俺は公爵家の懐中時計を出そうとして、今はフォンフリーゼ公爵家の家紋が入った時計しか持っていないことを思い出した。

そうだ、グウエンと交換したんだった。

身分を明かすのに必要だから、早々に新しい時計を作るつもりだが、今は見せられるものがない。ファネル総帥の書状を出して説明してみよう。

そう考えながら神殿の門に向かい、ふと思った。

新しい懐中時計ができたら、この時計はグウエンドルフに返した方がいいんだろうか。あれをもらったのは、時計がないと不便だからって意味もあったと思うし。

でも、グウエンドルフは俺と時計を交換したかったんだよな、多分。なら返さずに持ってた方がいいのか？俺が決めていいって言ってたから、告白の返事をするまではこのままでいいってこと？

返すのか？と思った瞬間、手放したくないと感じてしまった自分の感情に混乱しそうになる。

返したくない。

俺は返したくないのか。……なぜ？

「……待った。今は考えるの、やめよ」

そう呟^{つぶや}いて軽く頭を振った。

今からの調査に支障が出ないよう一日思考を停止して、気持ち切り替える。時計の代わりに上着から総帥の書状を取り出した。

俺が近づくと、門の前に立つ警備の騎士が不審そうな顔をした。

総帥のサインを見せて警戒を解いてから、調査のことを説明しつつ、中を見せてもらえないか頼んでみた。宮廷魔法士の徽章^{きしやう}が入った杖も見せたが、門番の騎士は首を横に振った。

「神官と警備の騎士以外は立ち入ることはできません。王宮からも神殿警備の強化を命じられていますので」

「昨日、不審な人物が目撃されたと聞きました。ファネル総帥の命を受けて調査に来たんですが、

それでも駄目ですか？」

食い下がって見たものの、騎士は険しい表情のまま首を縦に振らず、一度神殿の中に入って司祭を連れてきた。神官服を着た司祭の老爺^{ろうや}は申し訳なさそうな顔をしていたが、意思の強そうな目でじっと俺を見ている。

「申し訳ありません、レイナルド卿。バレンダール公爵様からも、決して部外者を中に入れてはならないと命じられておりますので」

「そうですか……。封印結界に問題がないかどうかだけでも確認したかったんですが」

「私の責任において、何も異変は生じておりませんと申し上げます。ご安心ください」

バレンダール公爵領の神殿では毎回この押し問答をするんだが、今日も俺を中に入れる気はないらしい。本気で入りたいなら、多分あと二時間くらい粘る必要がある。でも、今日はもうそんな時間ないし。見た限り神殿の様子は普段と変わらないようなので、大人しく引き下がることにした。

その代わり神殿の周囲を調査する許可をもらい、俺は神殿を後にしてイソルデ樹林の中に分け入った。どの公爵領でもそうだが、封印結界を守護する神殿の周りには、いくつか魔物避けの結界が張られている。それを一つ一つ見回って、異常がないことを確認した。

「特に問題なさそうなんだよな……」

爺^{じい}さんが言ってた不審人物っていうのは何だったんだ？

そんなことを考えながら、最後の魔物避けの結界を確認したときだった。草むらの中で何か^{かす}微かに光っている。

「これは……？」

落ちていたそれを拾い上げると、小瓶だった。木々の隙間から差し込む日の光に反射して光っていたらしい。中身は空だが、よく見ると底が黒ずんでいて、液体がこびりついていた跡がある。

「んー……。怪しい、よな」

結界の近くに落ちているのはちょっと不審なので、念のため回収しておく。王都に帰ったら、総帥に確認してもらおう。

小瓶をポケットに入れたとき、ふわりと蝶が飛んできた。紙で折られた小さな黄色の蝶。

今度の蝶はウイルのものだ。ウイルはまだ子供だけど、手紙蝶を作ることにかけては俺よりも秀でている。昔色々あってウイルの生家はなくなってしまったけれど、あの子は手紙蝶の名手であつた子爵家の生き残りなのだ。

十一歳が作ったとは思えない、精巧で繊細な作りの美しい手紙蝶をそつと撫でる。

喫緊^{きつぎん}を知らせる赤色ではないけれど、手が空いたら確認してほしいというときの色だから、俺はすぐに紙を開いた。

『バレンダール公爵様がレイナルド様にお話ししたいことがあるとのことで、本日のご用事が終わったら公爵邸を訪ねてほしいそうです』

「……バレンダール公爵が？」

読み終わった俺は首を傾げる。

たまたまバレンダール公爵領にいるから、公爵の屋敷に行くならここからさほど時間はかからな

い。でも俺に話したいことって、一体何だろう。

ふと、この前の御前会議のときに会った公爵の顔を思い浮かべる。バレンダール公爵は昔から父さんと仲がいいから、エリス公爵邸にもよく訪れていた。俺も小さい頃から可愛がってもらっていて、庭で一緒に遊んだこともある。魔術学院に入学してからはほとんど交流がなくなってしまったが、今でも顔を合わせると優しく微笑んでくれる、穏やかで聡明な紳士だ。

もしかしたら、魔道機関車の事件のことを耳にして、何か有益な情報を教えてくれるのかもしれない。

俺はイソルデ樹林から出たその足でバレンダール公爵の屋敷に向かった。

公爵の屋敷に着くと、案内されたのは応接間ではなく執務室だった。

「やあ、レイナルド君。この前王宮で会ったとき以来だね」

最近公爵の間で執務室に人を呼ぶのが流行^{はや}ってるのか？ 多分、内緒の話だからってことなんだろうけど、ルロイ神官長といい、バレンダール公爵といい、このところ身分の高い人達とさしで話す頻度が高すぎる。権力者達の覚えがめでたいのはいいことなのか。事件の遭遇率も上がってるし、だんだん日常の感覚がおかしくなってきたよな。

「こんにちは、閣下。お話があるとうかがいましたが」

「ああ。忙しいところ悪かったね。さあ座って。君が最近、あちこち渡り歩いていると聞いたものだから、少し心配で連絡したんだよ」

バレンダール公爵は執務机の前に置かれたソファに座り、俺もその向かいに腰掛けた。気をつけていないと身体が後ろに倒れる、座面に身体が埋まるタイプのソファだ。

お茶が運ばれてくると従者が下がり、執務室の中に人がいなくなった。公爵は紅茶を一口飲むと、俺に穏やかな明るい^{はげやう}様色の瞳を向けた。

「調子はどうだい。エリス公爵からは、宮廷魔法士の仕事の傍^{かたわ}ら、公爵領の運営改善にも尽力しているって聞いているが」

「いえ、そんな。私の能力なんて、兄の足元にも及びませんから。宮廷魔法士を拝命しましたが、実際はファネル総帥のご用聞きをしたり、魔法陣の研究をしたりしているだけです」

「君は昔から魔法陣が好きだったからなあ。そういえば、先日はうちにも大規模な転移魔法陣を作ってくれたね。あれは大儀だっただろう。エリス公爵から構想を聞いたときは、まさか本当に完成するとは思わなかったよ。さすがだ」

感心しきりという顔で微笑みかけられて、俺は慌てて首を横に振った。これまで方々から散々と言われ方をしただけに、逆に転移魔法陣を褒められるとどう反応していいか困ってしまう。

「閣下、褒めすぎです。むしろバレンダール公爵領の中では、あまりいい評判ではなかったのではないかと思います」

「何故？ そんなことはないよ。新しい交易路を確保できて、皆感謝している」
うう、いい人……

手放しで褒められて、背中がむずむずする。俺が居心地悪そうにソファで背中を丸めていると、

バレンダール公爵は優しげに目を細めて、膝の上で手を組んだ。

「さて、君も忙しいだろうから、雑談はここまでにして大事な話をさせてもらおう。レイナルド君、君は今、ファネル総帥のもとで封印結界の襲撃事件について調べているね」

「あ……はい」

俺は公爵のセリフに頷いた。総帥には内密に動けと言われていたから素直に頷いていいのか迷ったが、断言するように言われたらしらを切れない。

「各地の神殿を見て回っているようだし、定期的に王宮にも顔を出していると聞くからね。事件の詳細を知っている立場からすると、レイナルド君が総帥に指示されて動いていることは明白だよ」

「あ、そうですよね」

「宮廷魔法士の中でも、君は若くて優秀だ。ファネル総帥が頼りにするのも頷ける」

バレンダール公爵がそう言ってまた褒めてくる。俺は普段貴族のおっさん達から残念令息と噂されているので、正面からこんなに褒められると喜びよりも戸惑いが勝る。なんなら調査の件で遠回しに苦情を言われるのではないかと深読みまでしてしまう。

それとも、公爵の目には俺が子供だった頃のフィルターがまだかかっている、ちょっとしたことで大袈裟に感動してしまうのか？ 俺もう二十歳なんだけど。

俺が「いえそんな」ともごもごしていたら、公爵は微笑みを収めてふと真剣な顔をした。

「私も今回の事件について考えていて、気がついたんだ。なんとなく、あの頃と似ている部分がある」と

「あの頃？」

俺が瞬きして聞き返すと、バレンダール公爵は一つ頷いた。

「君はバレンダールの大禍について、どれだけのことを知っているかな」

「バレンダールの大禍、ですか？」

俺はきょとんととして首を傾げた。

バレンダールの大禍とは、四十年ほど前に突然魔物が狂暴化したという有名な大事件だ。そんな昔の話をするなんて、どんな意味があるんだろう。てっきり今回の事件について、何か手がかりになりそうなことを教えてくれるのかと思ったのに。

俺は少し考えてから、口を開いた。

「詳しいことは、あまり。歴史の本で読んだり、叡智の塔で聞いたりしたくらいです」

「そうか。叡智の塔でね」

意味ありげに復唱して、バレンダール公爵が頷く。

「閣下はよくご存知なんですか？」

「私は当時十代で、兄を大禍で亡くしている。兄だけではなく、当時直属騎士団の現役だった者達、皆甚大な被害を受けた」

それを聞いて、俺は息を呑んだ。

公爵のお兄さんがずいぶん昔に亡くなったということは知っていた。何かの折に、父さんから聞いた覚えがある。でもバレンダールの大禍が原因だったとは知らなかった。